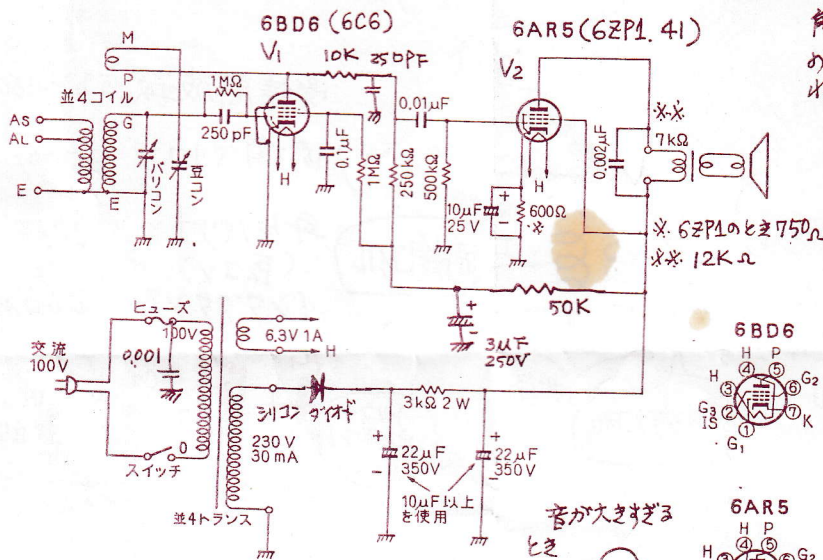
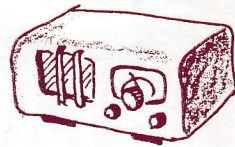
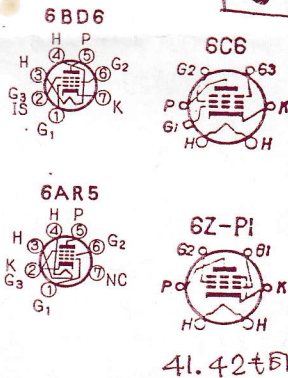


※1図 標準的な並四球型ラジオ [NHKラジオ技術教科書より]

再生カソード検波は周波数増幅2段のものが本機は後期のタイプです。これ以前のものはオール3極管27A-26B-12A-12Fでトランス結合のタイプでした。

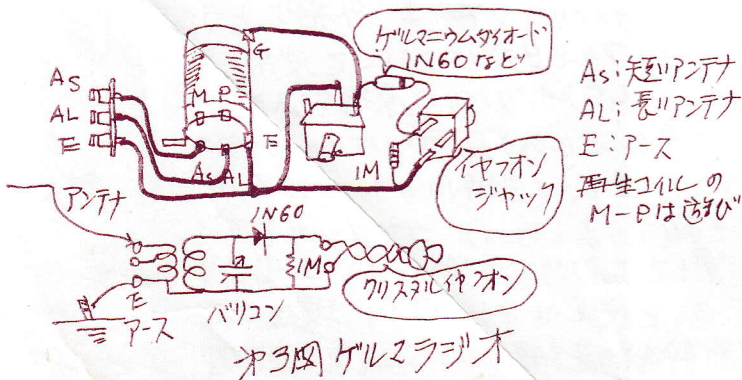


能率の低い5極管が増幅管の出現で逆にもよく作られました。ST管でつくるとき6ZP1は互換性がなかったので入手難です。41を軽く使うとよいでしょう。

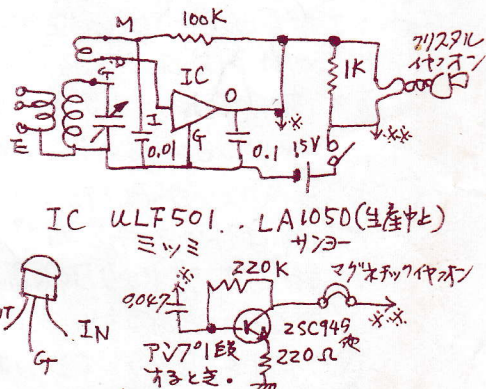


①再生の豆コンは50PFタムズ用/タイバリコン又はポリバリコン並列にコンデンサーを入れてCを少し高圧効果Eします。

※2図 標準的な並三(3管)ラジオ



※3図 ゲルマラジオ

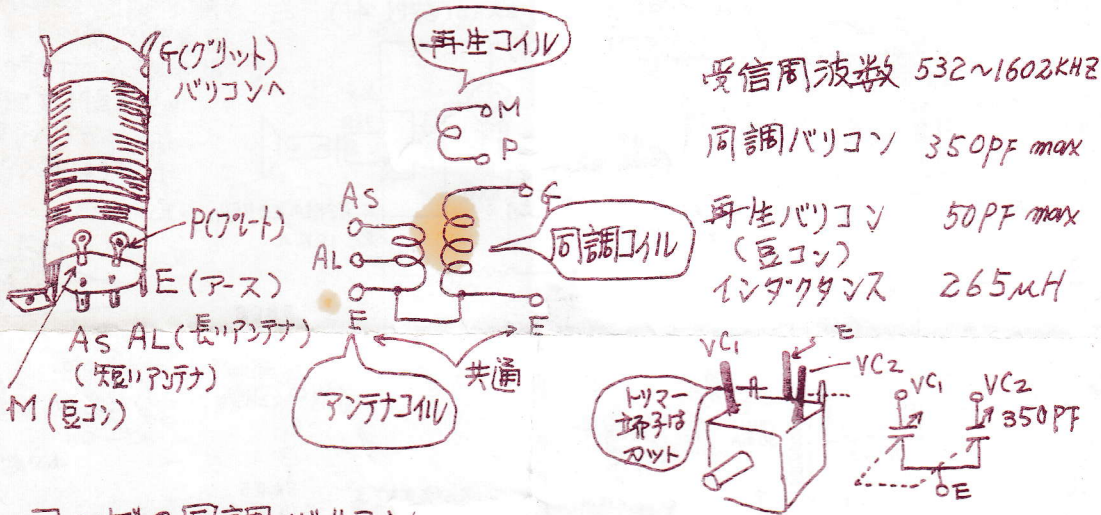


※4図 並四コイルを使ったICラジオ

並四コイルの名の由来は、再生グリッド検波、低周波増幅2段、半波整流の4球受信機(オ1図)を並四球受信機と呼びました。このラジオ用コイルとして作られたことから並四コイルと名がつけました。4球でも高周波増幅回路付のタイプE高一受信機と呼び並四と区別していました。

応用の広い並四コイル

並四コイルは中波ラジオのコイルとしては基本的なものですから並四に限らず、入門用の鉱石(ケルマ)ラジオ、1球、2球、3球等のストレートラジオ、1~2石のトランジスタ、やFETを使ったラジオ等、その利用価値は高いものです。



コンビの同調バリコン

かつては 350PF のエアバリコンが市販されていましたが、すでに生産中止してから 15~20年 たっていますので、まず入手は不可能です。そこで、当社では ホリバリコンで 350PF (350PF X2 の一方を使用) を用意して、この並四コイルとコンビで使用できるようにしました。

ST管(ケルマ管)など使用のときホリバリコンでは、外觀上、どうもと思われる方は、ホリバリを小エリアルミBOXに入れて使用すると、球にもマッチします。昔(50~60年前)ホリバリの原形である、シルドバリコンと呼ばれる、平たい金層ケースに入ったホリバリの親分のようなバリコンがあったことを覚えておきます。(当時ホリシートは銅のシートでセルロイドのシートを絶縁に使用していました。) ラジオ少年であった諸兄は、ジャンクBOX等を探索してエアバリコンがみれば、2層でも3層でも、片のうちの1セクションを使えばよいのです。現在球式ラジオを作るうえでは、新幹線の走る時代にはSL(蒸気機関車)を再現するものでも、パーツ集めが大変ですが、そこが面白いです。